

# 書物史と思想史

## History of a book and thought

水田 洋  
MIZUTA Hiroshi

Kenneth E. Carpenter, *The dissemination of the Wealth of Nations in French and in France 1776-1843*. New York, The Bibliographical Society of America, 2002. LXIII, 255 pp.

### 1

『国富論』のフランス語およびフランスにおける普及、1776年から1843年までという、ちょっと風がわりな題名の説明が、この本の輪郭を示すのに役だつだろう。まず「フランス語」はもちろん、フランス語への翻訳を意味するが、つぎの「フランス」と「普及」には、翻訳以外の受容と普及として、ふつうに考えられる書評のほかに、翻訳と書評の出版と読まれた（文字どおりの普及）が含まれる。この観点は、これまでの導入史にはなかった。最後につけられた1776-1843という年代のうち、前者はもちろん『国富論』の出版年だが、後者は、ガルニエの翻訳がアドルフ・ブランキ編集によって再版された年である。このガルニエ＝ブランキ版はたしかに、最近の Taïeb 版（どう読むのか）が出るまで、フランス訳標準版として約150年間通用していたのだが、著者はそこに、単に時間の経過あるいは翻訳の改良による普及を見るだけでなく、『国富論』への評価がフランスで、時論からカノンへと上昇していく過程を見るのである。カノンということばは、もともとキリスト教会の用語であって、社会科学の用語としては適当ではないが、一種の流行語で、著者もつかっている。

著者はこの過程を30点の文献について検討していくのだが、それが一直線でも無色透明（原典にたいして）でもないことはいうまでもない。そうでないからこそおもしろいのであり、著者はこの分析にかりたてられたのだ。ところが著者がこのことに目をさましたのは、一橋大学社会科学古典資料センターに勤務中だったというので、思わず笑ってしまった。

著者は、ハーヴァード大学の Graduate School of Business Administration の Baker 図書館のなかの、Kress Collection のキュレーターであったときのことを、次のように回想している。「1970年代には、司書は翻訳を入手しようとしませんが、ふつうであったが、私は翻訳が原典といちじるしくちがっている例に次から次へと出あった。…私は翻訳者たち、編集者たち、出版者たちが、自分たちの文化が必要としているとかれらが思うとおりに原典を変えたのを、理解することができた」。このような問題意識の芽ばえは、クレス時代には展開されなかったようで、著者は「クレス・コレクションは『国富論』のフランス訳諸版をもっていたが、それらは本質的にストレートな翻訳のように思われ、したがって特に関心をひくものではなかった」という。しかしこれらの翻訳が、じつはストレートでなかったことが本書の主題なのだから、この発言は、この段階では著者がまだ屈折に気づいていなかったことを意味するのか、あるいは、翻訳そのものだけでなく周辺事情がわかってはじめて、問題が明確になったといたいのであろうか。

われわれ日本人は、比較思想史とまではいわなくても、外国の諸思想をとりあつかうときに、

つねに翻訳・紹介による屈折に気を使い、なやまされている。だから翻訳を使用するときも、原典への引照を忘れないのである。原典と日本語のページを示したうえで、自分の新訳で引用することさえある。ところが、諸外国の例を見ると、自国語への翻訳があるのに、原典を併記するなどということは、ありえないといっていいただろう。原典に忠実な日本の研究の方がチミツだともいえないようであるが、屈折への敏感さは、比較思想史にとって不可欠の素養であり、それはまた、中進国（先進と後進のあいだ）で比較的成立しやすい感覚である。マルクスの *Bürgerliche Gesellschaft* を *civil society* と翻訳するときの屈折に気づいたのは、日本人の方が先だと思っていたら、ほとんど同じころ（1947）『ドイツ・イデオロギー』の英訳者、ロイ・パスカルが、スコットランド啓蒙思想の用語法との対比から、それを指摘していた。イギリスとドイツを対比することが、問題を鮮明にするのであろうか。

それだから著者も、メンガー文庫にふれたことが、問題を展開するきっかけになったというのである。「1975-76の学年に私は休暇をとって東京の一橋大学で、バート・フランクリン・コレクションの初期経済文献の目録作成に協力した。一橋は、オーストリアの経済学者カール・メンガーの蔵書を所蔵していて、メンガー・コレクションには、私がこれまで見たことがない、けっして再びみることがないかもしれないような、多数のドイツ訳があった。私は暇をぬすんで、さまざまなヨーロッパ言語からの、およびそれらへの、ドイツ語文献の目録をつくりはじめた」とかれは回顧しているが、この仕事は帰国後、イタリアおよびスウェーデンについて継続され、フランスについての本書になるのである。ドイツとイタリアの調査はつぎのように実をむすんだ。スウェーデンについても同様だと思うが、手もとにない。

*Dialogue in political economy. Translations from and into German in the 18th century.* Boston, Mass., Baker Library. Graduate School of Business Administration, Harvard University, 1977.

*Italian economic literature in the Kress Library 1475-1850.* 2 vols. Rome, Banco di Roma, 1985.

まえに引用したところからもわかるように、著者は屈折を翻訳者だけの問題に限定していない。翻訳であれ書評であれ、原典を紹介する人びとと、それを受けとる人びとすなわち読者とをあわせた受容国の文化が、屈折を引き起こしていることを、著者は指摘しているのである。この視点を著者に示唆したのは、1990年代に一種の流行になった出版史の研究であって、著者はとくにつぎの二冊をあげている。

Carla Hesse, *Publishing and cultural politics in revolutionary Paris, 1789-1810*, Berkeley, 1991.

Roger Chartier, *The order of book: readers, authors, and libraries in Europe between the fourteenth and eighteenth centuries*, Stanford, 1994.

示唆ということでは、もうひとつ、著者は頼建誠（台湾、清華大学）のプロジェクトをあげている。これは頼の論文、

Cheng Chung Lai, Adam Smith and Yen Fu: Western economics in Chinese perspective, (*Journal of European Economic History*, 1989) にはじまり、Chen Chung Lai (ed.) *Adam Smith across nations. Translations and receptions of The Wealth of Nations*. Oxford University Press, 2000. に結実するのだが、カーペンターの本書とのかかわりは、1992年にハーヴァード・エンチン・スカラシップでやってきた頼が、日本語で発表されたカーペンターの論文（「ヨーロッパ大陸におけるスミスと『国富論』』刊行200年記念ファクシミリ版アダム・スミス『国富論』解説、雄松堂、1976, pp. 18-29）の英語版がほしいといったことにはじまる。カーペンターは、古い

論文を提供するより全部書きなおすことを思いたち、my scholar wife の強力な支持をえて、できあがったのが本書なのである。カーペンターは「頼教授の熱意が伝染した」と書いている。したがって、頼が本書の生みの親といってもいいかもしれないが、かれ自身の編著は、大部分が既発表の論文のよせあつめであり、問題意識もばらばらで、フランスについてジッド＝リストを引用したことを書評でキース・トライブに「まったくのスペースの浪費」といわれたような欠陥がある。

なお、スミスの著作と思想のフランスを含む各国の普及については、つぎの論文集および書評のなかでも言及されているので、念のためあげておく。それらすべてを本書が抜いているのは、何よりも著者のライブラリアンとしての力量と視点である。ただし、あえてここに以下の3点をあげるのは、批判あるいは望蜀の意味もあって、それはスミスは『国富論』だけではないということである。

Hiroshi Mizuta & Chuhei Sugiyama (eds.), *Adam Smith: International perspectives*. London, Macmillan, 1993.

Hiroshi Mizuta (ed.), *Adam Smith: Critical responses*. 6 vols., London and New York, Routledge, 2000.

Keith Tribe, *A critical bibliography of Adam Smith*. London, Pickering & Chatto, 2002.

## 2

この本は、Preface (pp. IX-XV), Editorial methodology (pp. XVII-XVIII) のつぎに French transformations of the Wealth of Nations: From marginality to centrality to canonicity. という題の序論 (pp. XXI-LXIII) があって、資料編ともいうべき本論 (pp. 1-249) および索引 (pp. 251-255) がくるという構成になっている。こういうことをわざわざとりあげるのは、40 ページをこえる序文とそのあと本論との関係がはっきりしないために、書評者は文字どおり右往左往しなければならなかったからである。序論でかなりくわしく概観を与えてくれたことはありがたいのだが、中途半端なくわしさは、むしろないほうがよく、これはもっと省略して大部分を本論にくみこむべきではなかったか。あるいは逆に、本論を完全に資料編として、序論を拡大すべきでなかったか。

Editorial methodology は、資料の書誌的記述の原則を述べただけだから、利用者が必要に応じて参照すればいいだろう。序論ではまず、その題名のとおり、『国富論』普及の3段階が、原典出版から革命直前まで (1776-86)、革命とその前後 (1786-1800)、革命後 (1800-1843) に区分される。もっとも、著者が数字で段階をくぎっているのは 1800 と 1843 (pp. XXIII & LXIII) なので、1776 は問題がないとしても、1786 には説明が必要だろう。この年は、著者によれば、ブラヴェのイヴェルドン (スイス) 版の翻訳がパリで再版され、フランス語圏の中央に位置づけられた年なのである。それまでの普及はマージナルなものにすぎなかったというのが、著者の論点のひとつなので、これについてはすぐあとで説明する。1800 は、著者によれば、*Mercur de France* の書評が『国富論』の三つのフランス訳の出版を予告したことによって、正典化を表示した年である。三つとは再版も含めてルシェ、ブラヴェ、ガルニエの翻訳であり、その最後のものの拡大改訂版が、アドルフ・ブランキの序文をつけて出版されたのが、1843 年である。革命とその前後という時期は、以上2段階には含まれたことによる区分にすぎないようだが、著者はとくに 1790-95 年を、革命の課題としての近代国家の建設のために、『国富論』が研究されるようになった時期と見ている。たしかに、この時期には、ブラヴェと

ルシェの翻訳が、くりかえし出版されている。

第2段階にこのような意味をあたえた著者のやりかたを拡張すれば、第1段階を、アンシャン・レジームとフィジオクラシーの盛衰に、第3段階をフランス産業革命に、むすびつけることができるだろうが、著者は「同時代の知的潮流の影響をつけくわえるべきだったかもしれない…が、私はそうすることを選ばなかった。…そのわけは、部分的に、私がフランス史家でも、経済思想史家でもないということである。…この種の研究にたいして高すぎるバーを設定しないことが大事だとおもわれる」とのべて、問題意識を限定して明確化している。「こうして、この研究は、他の人びとが使用する原資料の組織された提示だといっていいだろう。これまでばらばらで、孤立し、基本的には無意味であったものが、いまや、歴史家たちが依拠して意味をひきだすことができるようなやりかたで提示されるのだ」(pp. XXVII-XXVIII)。

それでは、著者は何をどのように提示するのか。どこが歴史家、思想史家とちがうのか。本書の題名に *dissemination* (普及、滲透) ということばがつかわれていることから推測されるように、翻訳が出版されたというだけでなく、出版されるまでの(意図されながら実現されなかったことも含めて)出版事情、出版されてからの売れかたと読まれかたが分析の対象とされるのである。読まれかたは、理解のされかたの問題として、翻訳の正確さの問題に通じ、この点でまちがいなく思想史の研究と合流する。もっとも、思想史にしても、思想の社会的存在形態に目をつければ、こうしたビブリオグラファーあるいはライブラリアンの領域(*book history* ということばもある)に、侵入せざるをえないだろうが、他方で社会史的思想史という手法は、読まれかたには注意しても、出版のされかたには踏みこまないのがふつうである。

いまいった合流点として最もわかりやすい例は、カソリック諸国語訳の『国富論』が、第5篇第1章の宗教・教会論をどうあつかっているかという問題である。著者も「もっとも問題的な部分が、ラ・エイ版(後述)では省略され、ブラヴェ訳の雑誌連載版(後述)では、脚注つきで訳されていることを指摘するのだが、こうした比較そのものについては、つぎのようにのべている。「そのほかにも、フランスとその諸制度への批判をやわらげるような変更がなされていることはたしかではあるが、私は翻訳と原典をいちいちつきあわせるという、細部の比較はしなかったし、まして、諸翻訳およびその諸版の相互比較はやらなかったのである」(p. XXXI, n. 19)。これまで手をひろげたらたいへんではあるが、合流点で出あった思想史と書物史とが、再びわかれるのがここののである。わかれた著者は、タイポグラフィーにむかう。

著者はその方法的議論を「タイポグラフィーが意味をかえうということは、D. F. マッケンジーによってはじめて証明され理論化された接近方法である」ということから始めて、つぎのような文献をあげている。

D. F. Mckenzie, *Bibliography and the sociology of texts*, London, 1986.

Roger Chartier, *The cultural uses of print in early modern Europe*, trans. L. G. Cochrane, Princeton, 1987.

Roger Chartier, *The order of books: Readers, authors, and libraries in Europe between the fourteenth and eighteenth centuries*, Stanford, 1994.

Roger Chartier, *On the edge of the cliff: History, language, and practices*, trans. Lydia G. Cochrane, Baltimore, 1997.

G rard Genette, *Paratexts: Thresholds of interpretation*, Cambridge, 1997

著者は、おそらくマッケンジーに依拠して、著作の *paratext*, *peritext*, *epitext* というタームを使用する。これらの具体的な内容と相互関係は、必ずしも明白ではないが、接頭語を準、近、

外と訳してみると、準・本文、近・本文、外・本文ということになり、本文との距離の見当がつく。paratext は社会的存在としての思想を、さらに物質的存在にまで具体化したものと考えていいようにおもわれる。それは peritext と epitext から成り、前者は直接に出版社が責任を負うべきもの、すなわち版型、通し見出し、目次、索引、序文、序論である。読者がこれらによって、著作の存在を確認するということだろう。epitext は、この物質的存在を外側からかこむものであり、「本書における基本的な epitext は、広告と書評である」と著者はいう (p. XXVI)。出版にいたるまでの交渉を示す資料もふくまれるだろう。ジェネは、これらの要素をまとめて「本の入口 seuils」とよんでいるそうだが、それをシャルティエの、本のなかでその著者がいうことは「普遍的で固定した意味をもたない」という発言につながり、ポスト・モダン書誌学が成立するかもしれない。しかし物質的存在は歴史的社会的に規定されているのである。

著者は、「本書にはこれらのさまざまな paratextual な要素がすべて含まれている」と書いたあとで、「理想的な書物史家は、paratext に出版の法的構造、出版業界の組織と経済的状况、政治的諸事件を追加することができる」というのだが、これはそれぞれの著作に直接にかかわる paratext のさらに外側にある一般的状況という意味だろう。

以上、書物史研究の方法についてのべたことは、しろうとの初歩的なまちがいを含んでいるかもしれないが、ただひとつ、まちがいでなくいえることは、書評の重要性の強調であって、それらについての解説とリプリントは、本書の最大のメリットのひとつである。

### 3

『国富論』はフランス語では、まず二つの書評とひとつの抜粋によって紹介された。それより早く、アンドレ・モルレが、出版前にスミスから寄贈されたという原典によって全訳を企てたが、出版者を見つけることができなかった。出版できなかったものは後まわしにして、上記3点はつぎのとおりである。

*Journal encyclopédique ou universel*, Bouillon, 1776, Vol. 7, pt. 1, pp. 3-15; pt. 2, pp. 252-263.

*Journal des savants*, Paris, 1777, feb., pp. 81-84

*Fragment sur les colonies en général, et sur celles des anglois en particulier*. Traduit de l'anglois. Basle. 1778.

出版地がパリのほかにブイヨン（ベルギー）とバーゼル（スイス）であることに注意された。周辺部でフランス語で出版されただけでは、十分な意味でフランスに紹介されたとはいいがたく、フランスの読書界にとって、まだ marginal あるいは peripheral な出版物だったのである。モルレが出版できなかったことも、そういう位置づけのなかにいれていだろう。

著者によれば、*Journal encyclopédique* は、1756年の創刊後まもなく発行部数が1200に達して、フランスを含む全ヨーロッパに諸者をもったという。その政治的立場は新旧の交差点といわれ (Jean Sgard, *Dictionnaire des journaux*, Paris & London, 1991) 1793年には革命期の変化に対応できないうで廃刊された。ところが、この雑誌がルシェの新訳について長篇の critical review (1790) を掲載したことを、著者が「当時は知的流行にあわなかった証拠」としているのは、根拠不明である。どれほど批判的であっても、とりあげたこと自体に意味があるだろうし、そもそも当時の流行なるものが何を意味するか不明である。

著者は二つの書評の全文を採録して、前者が貨幣論、公債論に注目していることを指摘している。公債論は『国富論』の最終章であるが、書評は、植民地論から財政論へ飛躍して、問題



的な第5篇第1章(宗教論)を無視した。第5篇をたんに財政論として紹介する点では、第2の書評も同じである。なお、この雑誌は1665年創刊の保守系誌で、1777年には多数の検閲官を含むグループによって編集されていたという。

モルレは、スミスから原典を、出版まえに送られたと書いている(本書の本論では経緯が肯定的に紹介され、序論では否定)。したがってかれは早くから翻訳に着手して、チュルゴへの手紙などに見られるように、出版に努力した。それだけに自信もあったようで、著者は『回想記』はモルレが、自分の翻訳はガルニエを含むすべての翻訳よりすぐれていると信じていたことを示している」という。ただし、ここにガルニエを含めたのは、著者の早とちりで、たしかにモルレはブラヴェとルシュの名をあげて、「これもあれも問題について無知だ」といっているのだが、ガルニエへの言及はなく、つぎのような編注がつけられている。「そのご、ブラヴェとルシュのものよりすぐれた翻訳が、アベ・モルレの友人であるガルニエ侯によって出版された。アベ・モルレはかれについて、これ以上何もいっていない」(*Mémoires (inédits) de l'abbé Morellet suivis de sa correspondance avec m. le comte R\*\*\*, ministre des finances à Naples. Précédés d'un éloge historique de l'abbé Morellet, par m. Lémontey, Paris, 1823, tom. 1, p. 245*)。

出版はできなかったがモルレは第5篇第1章までを翻訳した。いくつかの写稿がつくられて回覧され、原稿とみられる4巻がリヨンの市立図書館で発見された。出版できなかった理由としては、一方に出版者の側の資本と関心の不足があり、他方にかれの翻訳草稿が警察によって押収されるというような政治状況があった。著者は押収について序論の注15の最後の行でふれているだけだが、これこそ marginality の強力な証拠ではないのか。これを強調すれば、John Dalrymple の *Memoirs of Great Britain and Ireland* のブラヴェ訳が印刷終了後に出版を禁止されたことを、序論と本論でかさねてのべる必要はなかっただろう。(ついでに言えば、ダルリンプルのこの本は、天野ビブリオグラフィーではアダム・スミスの著作とされていて、ぼくは何度かこれについて質問をうけた。)

植民地論の抄訳は、匿名で出版されたが、著者はバルビエによってÉlie Salomon François Reverdilであることを確認した。かれはデンマークのクリスティアン7世の顧問として、国の近代化につとめたスイス人であり、抄訳は原典の第4篇第7章からとられた。本書にリプリントされた序文は、1ページたらずだが、『国富論』全体をまとめているので、かれもまた全訳の意図があったのではないかと思われる。なぜこの章を最初に出版したかということについては、このテーマが有力者あるいは出版者の注意をひきやすかったかもしれないということのほか、貴金属が真の富だという理論的に否定された説のまちがいを、植民地について実証しようとしたことが考えられる。

これに続いて、1778-79年に2巻本の全訳が出版されるが、扉には題名、著者名、出版地(La Haye)、出版年があるだけで、訳者名、出版者名はない。翻訳は、宗教関係の部分(第5篇第1章)に変更または削除があるほかは、パラグラフごとの比較では脱落がないと著者は報告している(編集方針として一字一句の点検はおこなわない)。この版について全く意外だったのは、これが *Mecure de France* (1788. 3. 22) にフランスの外で広く売られたと書かれたことである(pp. 24 & 70)。そうであればマージナルだったにちがいない。著者はこの版について訳者名と出版者名のない「特に廉価本らしい外観のセット」といい、「タイトル・ページのラ・エイという出版地は、ほとんどまちががなく虚偽だろう」としている(p. XXII)。著者は *Mercure de France* の書評を根拠として、この翻訳が国外のどこかで出版されて、パリにはとどかなかつたと主張し、追加的証拠として、この書評自体が翻訳の出版年を不正確に伝えている

ことをあげる。書評がそれを 1778 年としたのはまちがいで、4 巻本の後半は 1779 年出版であり、このまちがいは、書評者自身が実物を見なかったこと、すなわちこの翻訳がパリで流布しなかったことの証拠だというのである。著者は the essential unavailability of the edition と書いているが、18 世紀の書評、しかも出版後 10 年を経過して書かれた書評に、それほどの証拠能力があるだろうか。しかも著者はすこしあとで、この書評が「外国人たちが熱心に求めたために、ラ・エイ版はパリに到達しなかった」としていることは「限定を必要とする」とつけ加えるのである (p. XI)。この版が 1789 年に t.p. だけかえて、スミスへの言及なしに、再発行されたのは売れ残りの証拠だろうが、これについては普及範囲は問われていない。

結局、この翻訳について、確実にいえることは、翻訳者も出版者もわからず、出版地もあやしい、粗末な造本だということだけであって、出版地名のラ・エイがあやしいということは、フランスで流布しなかったらしいということから、逆に推定されたのではないだろうか。なぜなら、ラ・エイ (Den Haag 日本名ヘーグまたはハーグ) の出版物がパリに到着しないとは、到底考えられないことだからである。たしかにラ・エイとアムステルダムはロンドンとともに、フランスの出版者が検閲と弾圧をのがれるためにしばしば使った偽出版地ではあったが、じっさいにそこでフランス語文献の出版もおこなわれ、アムステルダムのミシェル・レイは有名だった。

このことにこだわるのは、これに続く翻訳者、ブラヴェが自分は『国富論』の最初のフランス訳者だといっているからである。ラ・エイ版の国内流布を前提にすれば、その匿名の訳者はブラヴェだということになり、前提されなければ、最初の訳者は無名のまま残される。ふたつの訳の文体は比較すれば、まったく別の訳者によるものであることが、かなり確実にわかるかもしれないが、それができないまま、ぼくは匿名の訳者をブラヴェと推定した (Critical responses)。しかし、現在のところ、これは早とちりであったとしなければならないようである。

ブラヴェはすでに『道徳感情論』を翻訳していたのだが、それでも『国富論』の翻訳の出版者をフランス国内で見つけることができなかった。スミスの両著にたいするフランスでの評価のちがいは、興味あるテーマだが、ここでさらにたちいることはできない。著者が 1775-88 年にフランスで翻訳されたイギリスの経済書がふたつしかなく (アーサー・ヤングとジョージ・クロフォード)、ジェイムズ・スチュアートの『経済学原理』の翻訳の出版が挫折したことをあげている (pp. XXXIII, XXXV-XXXVI) のも、イギリス経済思想の受容の困難さを示すものだろう。フィジオクラシーの支配がその一因であったかどうかには、著者はふれていない。

そういうことで、ブラヴェの翻訳は、匿名でパリの雑誌 *Journal de l'agriculture, du commerce, des arts et des finances* の 1779 年 1 月号から翌年 12 月号にわたって連載された。ブラヴェは *Journal de Paris* への手紙 (1788) で、自分はまったく私的な目的で翻訳したものを、編集者の要請に応じて連載したのだとのべているが、著者はこのことに関連して、出版者だけでなく翻訳者にも、経済問題があったのではないかと指摘している。ブラヴェだけでなくモルレも、収入が目的ではないといっているのだが (pp. XXXI, XXXVII-XXXVIII)。

ブラヴェの翻訳は抜刷が 3 巻にまとめられて、おそらくパリで出版されたのち、12 折版 6 巻にまとめられて、やはり匿名で 1781 年にスイスのイヴェルドンで、F. B. De Felice によって出版された。抜刷りの合本は、パリで出版者を探すためだったが、成功しなかったのであり、著者は現在 2 部を確認したにすぎないという。イヴェルドン版については著者は「paratext はこれが重要な著作だということを示さない」というのだが、こういう印象で marginal から正典への発展を物質的に示そうというのだろうか。そういうことよりも、出版者であるドゥ・フ

リースがヨーロッパ全体にわたる販売網をもっていたという指摘のほうが重要である。しかし、この版もラ・エイ版とおなじく、書評が出なかったために、売行きは不良で、残部を再発行しなければならなかったと、著者は言いながら、注では「じつは翻訳はうまいビジネスでありえた」というのである。ヌシャトル出版協会についてのこの注はそれ自体としてはおもしろいのだが、場ちがいだらう。

このように『国富論』が marginal な地位にとどまったのは、著者によれば、造本が見ばえせず、書評でとりあげられず、訳者も出版社も有名でなかったためであり、この限界をのりこえたのは、*Encyclopédie méthodique*, vols. 2-4 (1786-88) に、抄録が連載されたことによるという。この雑誌は、いうまでもなく、フランス最大の出版者パンクックのもので、発行部数は4000-5500であった。この抄録について著者は原典との対応関係を示すにとどめて内容にはたちいていないが、それでもどこが省略されたかはわかる (pp. 41-53)。

なおこのころ、スミスはブラヴェあての手紙で、「フランスの歩兵大佐ノール伯爵」が、翻訳を計画していると告げている (1782. 7. 23)。著者はノールについて、ロスよりくわしくしらべはしたが、実質的な成果はない (p. 40)。

ブラヴェの翻訳は、匿名のまま、ポワソン (1786) とデュプレイン (1788) によって版をかさね (出版地はともにロンドン=パリ)、ラ・エイ版も出版者名なしにアムステルダムで再版される。本書にはデュプレイン版について、序文の変更と書評 (*Journal encyclopédique, Mercure de France, Journal de Paris*) が、紹介されているが、そのなかにはヴォルネーやマレ・デュパンが参加した論争が含まれている (pp. 62-79)。この訳は 1800-1 年に改訂版が出版され、ここではじめて「市民ブラヴェ」(アベでなく) が訳者として明示された。改訂の原稿となったコピーは、ブリティッシュ・ライブラリとエディンバラ大学図書館で著者によって発見されたのである。

ブラヴェ改訂版の後半が出た 1801 年には、ガルニエ訳の訳序部分 (128 ページ) が印刷配布され (ウィスコンシン大学に 1 部現存)、翌年には 5 巻本全体が出版されるので、ブラヴェは訳者として名のりをあげたとたんに、『国富論』の訳者としての使命を終えたことになる。ガルニエ訳は、訳注を大幅に改訂増補して 1822 年の再販になる。これについては後述するとして、革命期に版をかさねたルシェ訳 (1790-1791) にふれなければならない。ルシェは、ジャコバン独裁の犠牲になった詩人であって、かれの『国富論』翻訳は、ふたつの点でコンドルセにむすばれている。第 1 はコンドルセたち (ペソネル、ル・シャプリエ) が編集した『公人叢書』に連載された抄録に、第 4 編第 1 章までは、かれの翻訳が使用されている (p. 81、その後はブラヴェ訳) ことであり (その時点ではルシェの訳は完成していなかった)、第 2 は、1791 年に出版されたかれの翻訳の第 1 巻に、続巻としてコンドルセの注の 1 巻が予告されていることである (注は出版されなかった)。『公人叢書』でスミスがとりあげられていることの重要性に注目したのは日本の方が早く (安藤隆穂『フランス啓蒙思想の展開』1989, p. 135) フランス人をおどろかせた。ところが著者は、コンドルセが二つの翻訳を抄録に利用したことを指摘しただけで、抄録そのものにはまったくふれていない。ライブラリアンとしての禁欲なのかもしれないが、フランスでの『国富論』正典化の過程を辿るのに、コンドルセ夫妻の寄与を無視するわけにはいかないし、そのことはさらに、妻による『道徳感情論』の導入をも含めて問題をとりあげるべきことを意味するのである。スミスは『国富論』だけではないということを否定するスミス研究者はいないだらう。

著者はこの翻訳がときの内相ガラによって政府の購入配布の対象となったことを、Jean



Gaulmier, *L'idéologue Volney, 1757-1820* (Beyrouth, 1951) によって紹介し、訳者序文 (pp. 89-90) と *Le Spectateur national; Chronique de Paris; Mercure de France; Gazette nationale, ou le Moniteur universel; Journal général de France; Journal encyclopédique* の書評とそのほかのアナウンスメントをリプリントしている (pp. 91-116)。革命とコンドルセにむすびついたこの訳は、アヴィニヨン (1791-92) とヌシャトル (1792) で版をかさね、1794年には改訳版が出た (改訳版への書評は pp. 138-150)。このほかに著者は Kayser の *Vollständige Bücher-Lexikon* によって、1797年のベルン版をあげているが、このカイザーの目録は、かなりまえにファビアンによって、あてにならないことが指摘され、あたらしい目録が出たはずである。

ガルニエ訳の初版と改訂版のあいだには、ルシェの改訂版とガルニエの初版のリプリントがあるほか、ゲール、セノヴェール、セーによる解説が書かれた。ガルニエは改訂版で注を1巻から2巻へ倍増させ、著者は73の注の主題をあげている (pp. 238-241)。ガルニエは、改訂版出版をまたずに死ぬ (1821) ので、ブランキの編集による決定版 (1843) になるのだが、ブランキは2巻にまとまったガルニエの注を解体して本文の該当箇所への脚注とし、これにビュカナンからシスモンディおよびセーにいたる経済学者から抽出した脚注を追加した。著者がこれらの脚注のうち第1巻分だけを筆者名別にあげながら、「WNのほかの部分への注は記録されなかった」としているのは、どういうことだろうか。おわりに近づくとき急ぎ足になったのか。

本書の最大の貢献は、多くの書評を採録したことであり、それについて60余年の出版史を思想史のからみあいとともに解明したことである。しかし、コンドルセとガルニエについてのべたような不満は残るし、ところどころに叙述の一貫性がないことも指摘しておいた。

(名古屋大学名誉教授, 学士院会員)